TSUREZURE-SUZUME, UMI

海

青波零せ / @aonami

ネプリ同時配信企画ペーパーウェル第５回「旅」

つれづれすずめ、海

三百字魔法少女・番外編

お出かけ準備

「すずめ、それも持っていくのかい？」

お父さんの問いかけに椎名すずめはびくりとして、腕の中のぬいぐるみを見せる。

「ダメ？」

「ダメってことはないけどね。潮風でべとべとにならなきゃいいけど」

そんなにお気に入りなんだな、と言ってお父さんは支度に戻る。すずめはほっと息をついて、ぬいぐるみ……ウェールを見る。ウェールは大きな目をくりくりさせてすずめを見上げた。

「すずめ、べとべとってどういうことだい？」

「行ってみればわかるよ。帰ったらきちんと洗わないと、かもね」

「洗うときは乱暴にしないでくれたまえよ？」

すずめは少々乱暴だからね、と笑うウェールを小突いて、すずめも準備を続ける。

明日は、海に出かけるのだ。

海に向けて

「おはよう、すずめちゃん」

今回の旅行は、友達の茨木あとりも一緒だ。麦藁帽子を被って、鞄を抱えたあとりはすずめの両親に一礼する。

「よろしくお願いします、おじさん、おばさん」

よろしく、と朗らかに笑った両親は、準備しておいた荷物を車に積んでいく。すずめとあとりも一緒に荷物を積み込んで後ろの席に乗り込む。そして、あとりはそっと、すずめの腕に巻きついたぬいぐるみに語りかけるのだ。

「ウェールちゃんも、よろしく」

「よろしく、あとり」

そう、あとりはすずめの秘密を知っている。ウェールがただのぬいぐるみでないことも。ウェールは耳をぱたぱたさせて嬉しそうに言う。

「楽しみだなあ、海」

かくして車が発進する。海に向けて。

海は大きく

「ほら、海が見えてきたぞ」

車を運転するお父さんの声につられてそちらを見ると、窓の外には光を浴びてきらきらと輝く水面が広がっていた。

「ウェール、あれが海だよ」

海を知らないウェールに見せるために、すずめはウェールの顔を窓に近づけてやる。すると、ウェールは窓に張り付くようにじっと海を見つめて、微動だにしなくなった。海が見たいと言ったのはウェールなのだが、果たしてこれはウェールのお気に召すものなのだろうか。反応がないことに居心地悪い気分になっていると、ウェールの耳がぱたりと動き、深々とした溜息とともに声が漏れた。

「すごいな……、広いんだなあ……」

車が進むにつれ、海は徐々に近づいてくる。到着も、近い。

潮水と毛並み

海に来たら泳がないと嘘だ。

すずめとあとりは水着に着替えて、海に向き合う。天気はよく、客の数もほどほど、よい海水浴日和だ。

すると、背後から声が聞こえてくる。

「すずめ、僕を置いていくつもりかい？」

見れば、すずめの鞄の中から顔を出したウェールが恨めしげにすずめを見上げている。

「うん。だって、絶対にべたべたになっちゃうし。っていうか既にべたついてるし……」

潮風はウェールのふわふわな毛並みとは相性が悪い。潮水ならなおさら、ぬいぐるみの体にすっかり染み渡ってしまう。

「泳げないんだから我慢しなさい」

「ええ～」

抗議の声を聞きながら海に向かう。ウェールには悪いが、後でウェールを洗うのはすずめなのである。

ないしょの夜

たっぷり泳いで、たっぷりご飯も食べて、夜がやってくる。

皆が寝静まった頃、すずめは目を開いて、あとりの様子を見る。既に起きていたあとりがこくりと頷いて、二人で音を立てないようにそっと起き出す。

ここからはないしょの時間。すずめは寝ぼけ眼のウェールを抱えて秘密の名前を唱える。

「空に描くは七色の虹、イリス・アルクス」

ウェールの姿が七色の光にほどけて、すずめの体を包む。そしてきらめく光が収まったとき、そこに立っているのはすずめより少しだけ大人びた虹色の魔法つかい、イリス・アルクスだ。

イリスはあとりに向かって手を伸ばし、あとりがその手を握り締める。

「行こう、あとりちゃん」

そして、窓枠を蹴って、飛び出す。

夜間飛行

虹色の尾を引いて、二人の少女は夜空を行く。

「わあ、きれい……！」

あとりがちいさく歓声をあげる。頭上にはおおきな月と満天の星、そしてはるか眼下には月明かりを照り返す海がある。

海はどこまでも続いていて、きっとイリスの魔法だけではその果てまでは届かないだろう、とイリスと一体となったウェールが呟く。事実、そうなのだろうと思う。イリスが自由に使える魔法は、それほど多くはない。

「それでもいいよ」

イリスは笑う。友達と二人でないしょの空の旅ができること。それがイリスのちょっとした、けれど最高の魔法。

「わたし、きっと忘れない」

「うん、あたしもだよ」

二人は、いつまでも、いつまでも、夜の海を見つめていた。